# 松風の家 下

宮尾登美子

文春文庫

松風の家（下）

定価はカバーに
表示してあります

1992年9月10日　第1刷
1994年8月10日　第5刷

著者　宮尾登美子
発行者　堤　堯
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替え致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-728705-6

文春文庫

# 松風の家
## (下)

宮尾登美子

文藝春秋

〈下巻　目次〉


第八章　秀旦銀杏　7
第九章　追善忌　50
第十章　百舌の声　72
第十一章　宮城野　139
第十二章　瞑想の松　176
第十三章　華燭　219
第十四章　守袋　271
解説　阿川弘之　298


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 松風の家　下巻

# 後之伴家系図

- 真鏡院（猶子）
  - 十二代 恭又斎
    - いよ
    - 由良子
      - 北盛行（益子の弟）
        - 女
          - 克一
        - 女
        - 久恵
    - 武市不秀
      - 哲也
  - 舞二郎
    - てい子
  - 十三代 円諒斎（文吉）
    - 益子
      - 五郎
      - 次子
      - 紗代子
        - 十四代 静々斎（昌之助）
          - 秀行
          - 愛子
          - 三恵子
      - 市子

# 加藤家系図

- 加藤 栄
  - 典正
    - くみ
    - 紗代子
      - 留男
      - 直
  - 辰寿
    - （養女）
  - 加奈
    - 鶴代（異母姉）
    - 等（異母兄）

作図／原　理

# 第八章　秀旦銀杏

「寺子屋」の玄蕃はあまり貫禄のない平敵だけれど、急に大音声を挙げて怒り出したそのひとは天水用の玄蕃桶と同じと思うほど大きくなり、いまにも不秀の衿首に摑みかからんばかりなのへ、不秀はひたすら平伏して詫びる以外、手はなかった。

「家元一味の者は、顔も見とうない」

と、吐き捨てるようにいう玄蕃の言葉を背に浴びながら、駅までの道を辿る不秀の胸は重かった。

人間おちぶれるって悲しいもんやな、礼ちゅうもんを皆、忘れてしまう、と不秀が思うのは、洗いざらしの継ぎの当った着物を着ている玄蕃は、こうなったは家元の腑甲斐なさのせい、とひたぶるにこちらを責め、こちらはまた、とき折の愚痴にも、

「宗家の苦しいときに弟子たちは何をしてるのかいな。こういう際にこそ真っ先に駈けつけて来て助けてくれるのが弟子の道ちゅうもんやおへんか。この頃はお朔日の勤めはおろか、節季の挨拶にさえ姿見せへん」

となじりたくなってくる。

不秀もいまは後之伴家の縁につながる身内でもあれば、玄蕃の激しい言葉に対し、どうしても抗弁したくもなるが、この先、決して口ごたえはすまい、と思った。この先、というのは、こんな身勝手な願いが一度で聞き届けられるとはゆめさら考えてはおらず、二度三度と足を運んだ上で、或はなお徒労に終るかも知れないことは十分覚悟の上であった。

京都から奈良の町まで通うのは朝星夜星を戴いての一日仕事で、それに汽車賃も決して楽な額ではないが、不秀は間をおかず再び玄蕃を訪ね、見事に門前払いに会ったあとで三たび、おとずれた。今度は、手土産に茶花畑からまもなく開花を迎える半夏生を掘り、たっぷり土をつけた根を油紙で包んで提げて行った。

「二度と来たらあかん、ちゅうたあるのに」

という怒声を頭から受けつつ、不秀は玄関の三和土の隅に葉のしおれた半夏生の包みをそっと置き、

「井戸ばたか、厠のねきか、どこぞ水気の多いとこへ植えてやっとくれやす」

といい放ち、一礼して帰ろうとしたとき、敷居際の近くまで玄蕃が寄って来て、

「性根見届けるまでは、何があっても折れへんさかいな。よう覚えとおきやす」

といって、不秀をじっと見つめた。

思いがけぬその言葉はずっしりと不秀の胸に落ち、落ちたとたん、武者震いに似た感じがあった。ようし、私の性根見たいなら見せたげよ、こんぐらいのことでへこたれる私やと思うてはるのんか、と拳を握りしめると俄に全身に力満ち、かの頑固な玄蕃との根比べにも勇気をもって立向えるように思えた。

翌日から不秀の油坂通いが始まり、ほとんど一日置きに汽車に乗ってはわき目も振らずに玄蕃宅を訪うのであった。この年は空梅雨で、次第に暑さ募ってくる日々を、家から七条の停車場まで、また奈良駅から油坂まで、傘もささず帽子もかぶらず、前のめりに急ぐ不秀の背はいつもべっとりと汗で着物が貼りつき、足もとは真っ白に埃をかぶっている。幾度訪ねても玄蕃は不秀に一瞥もくれず、背を向けて団扇を使っているばかり、水の一杯差出してはくれなかった。

由良子は、不秀の一心不乱をそばで見守りながら、内実は案じつづけであった。

日暮れてのち、疲れ果てた態で帰って来る不秀のために足を洗う水を汲んでやり、冷たい手拭いを手渡してやるのがせいぜいだけれど、不秀は口ぐせのように、

「お家のためえ。当り前のこっちゃ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

といい、せめて哲也をあやすのが唯ひとつの慰みらしかった。
六、七、八の三月、玄蕃の家の格子戸を開け、無言で一礼して帰るのも習慣になってしまうほど根気よく通い続けていると、不秀の胸のなかには、念願果すまで意地でも休みはせぬ、という思いは日増しに強くなってくる。
それが通じたかどうか、玄蕃がようやっと振向き、
「もうよろし。お上りやす」
の許しが出たのは、ちょうど立秋の日であった。
さすがに玄蕃もほっとしたような顔つきで、
「深草の少将やな」
といえば、不秀もいまは憎悪も薄らぎ、
「やっぱり百夜には届きませなんだ」
と笑顔で応じながら、着物の埃をはたいて対座した。
それでも玄蕃は、なお、
「根くらべに負けたんやないのえ。いまどき珍しあんたの心根に感じ入っただけや」
と後へは引かないが、不秀はこの日、帰ってのち由良子に、
「一時は意地悪なお方やと恨みもしたけど、あの一徹さは茶人としても筋が通ってるて思うたなあ。近くやったら、一度教えを乞いたかった」

と明かし、この三月のあいだに互いにどこか通じるものを感じ合ったらしかった。

中宮寺は、法隆寺夢殿の東に接して建てられ、慶長のころから代々宮家の姫君を門跡に迎える慣わしではあったが、いまは建立当時のおもかげもなく衰えており、尼僧の数もほんの僅かだという。

玄蕃は、当代門跡の子供のころから茶湯の手ほどきをし、また人格を見込まれて尼僧たちの行儀作法を指導していた時代もあったそうで、往時を不秀に語り、

「いまから四十年以上も昔の話どっさかいなあ。わしも元気やった。草履がけで斑鳩までせっせと通い、稽古は誰でも容赦せなんだ。怠ける者は笞でびしびし叩いたもんやった」

それだけに自分の口添えさえあれば、案外たやすく経筒を賜わるかも知れぬ、と匂わし、とりあえずこの由、門跡に言上すべく書状をしたためることを約してくれた。そして旬日ののち、京都の家に玄蕃からの返書が届き、それには、委細お伝えしてある故、必ずお土産持参の上で訪れられよ、とあり、添書に、自分も同道のはずではあったれども、このところのきびしき残暑にはいささか参っており、いずれよき季候の折にお礼に参上申上ぐ心づもりにて、とあった。

所期の目的に一足ずつ近づきつつある胸の昂ぶりを、不秀は由良子に語り、

「それにしても、お土産には何さし上げたらよろしやろ」

と相談すれば、こちらも手許豊かとはいえないままに猶子に聞くと、これは立ちどころに、

「食べもんがよろし。うちの困ったときのこと考えると、米味噌のたぐい頂くのが何よりやった。もち米なんどはどないやろ。仏さんへのお供えもんとして。

なあ、お道具頂かしてもらうのに、手土産にまたお道具ちゅうのもいやらしもんえ」

とすすめ、不秀は鏡台の曳出しの五厘銭までかき集めて五升のもち米を買って来、由良子は真新しい晒を二枚重ねにしてそれを入れる米袋を縫った。

翌八月十七日の早朝、米袋を納めた信玄袋が茶の間に置いてあるのを見て、由良子は持上げてみたところ、片手ではとうてい上らず、

「そら無理や、四貫おすもん」

という不秀に、

「大へんどすなあ、これ持って中宮寺さんまで」

とねぎらった。不秀は笑って肩に担ぎ、円諒斎に手をついて、

「宗匠さま、本日こそ、中宮寺のお宝の、この家へのご入来をみることになりそうどす」

といい、円諒斎も明るい顔で、

「そやな。今日こそ不秀の苦労が報われる日やな」

と喜ばしげに送り出した。

円諒斎のみならず、家中の者みな弾み、指折ってみればちょうど二十年ぶりにこの家に戻る尊い経筒を迎えるため、御祖堂（おんそどう）、仏壇、床を念入りに拭き清めて不秀の帰りを待った。そのうち長い夏の日もようやく暮れたが不秀は戻らず、由良子も夕方は蚊やり代りに草をふすべたり、子供たち四人の行水、と一しきり忙しく、やっと落着いたところで茶の間の八角尾長の振子時計を見ると九時であった。

皆茶の間に集り、

「えろ遅いな」

「何ぞあったんやろか」

と案じているうち、十時を過ぎた頃、ひっそりと通い門の枢（とぼそ）を落す音がし、足音を忍ばせるようにして台所口から入って来たのは不秀であった。

手には何も持っておらず、みるからに疲れ果てた様子で皆に頭を下げ、

「遅なはりました。すんまへん。今日のことにはなりませなんだ」

「ほな何か。頂かしてはもらえへんちゅうのか」

と身をのり出す円諒斎へ、

「いえ、私の段取りが悪おした。玄蕃さんのお口添えやさかい、それは大丈夫やと思いますけど、今日はご門跡さまがおいではらしまへなんだ。夕刻まで待たせて頂きました

のやけど、ひょっとしてお出先でお泊りやらも判らへんさかい、お引取りを、といわれて戻って来ましたんどす。明日また伺うて、今度こそ頂戴して参ります」

と、いかにも面目なげにいう不秀を見て、円諒斎はあっさりと、

「そうか。向うはお高いお寺さんやさかい、内の様子は判らへんもんなあ。重い荷物負うて行たのに、ご苦労さんやったな」

といって茶の間から去り、続いて後の者も出ていってしまうと、不秀は辛抱の糸が切れたようにどっと板の間に倒れ込み、手をついて由良子に水を所望した。このときの疲労はただならぬ様子で、

「大へんどしたなあ。すぐご膳にしますか。行水ならお釜に湯も沸いてますにゃけど」

と由良子が聞くと、不秀はそれには答えず、

「由良子はん」

と、この頃ようやく名前を呼び始めて、

「あんた一円ほど持ってへんか」

と聞いた。

「お銭どすか」

と由良子は思案し、子供のころは擬宝珠に貯めていたのを、この頃ではその都度台所用として円諒斎にもらっているだけに却って自由な金とてはないが、

「今日のぶんの残りなら、財布に十銭やそこらあります」
と戸棚から蝦蟇口を取出し、逆さにして十銭銀貨ひとつを不秀のてのひらにあけてやった。
あとから思えば、このとき不秀の状況にもう少し不審を抱き、根問いして金の用途と体の具合とを聞いておけばよかった、と由良子は身のおきどころもないほどに悔まれるが、日頃から口数の少ないひとではあり、とくにこのときはものをいうのも大儀そうに見受けられたので、それ以上は何もいえなかった。
この夜、不秀は食欲もあまり無く、そそくさと行水を使ったあと、すぐ蚊帳のなかに入って、
「よう寝てる」
と哲也の顔をしばらく見守り、
「今日は泣かなんだか。よう遊んでたか」
といつものように聞き、横になって団扇を使いながら、ゆっくりと、
「哲也はなあ、あんたの血ぃも分けてるけど、私はやっぱり私の後、取ってもらいたいと思てる。仲先生や私を上越す立派な業躰になって、次の代の昌之助さまをしっかりお守りして欲しいて、こない思てる。
も少し経ったらな、私が手ほどきしてきびしい稽古つけよと考えてるさかい、あんた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com